西海ゼミ３０周年に寄せて

2008 年 12 月 22 日　西海奈穂子

父が大学でいったい何をしているのか、私は知らない。「Robinson 状態方程式」とか、「エントロピー」とか「高圧気液平衡装置」とか、全くもって意味不明である。ただ、自分の父親が何かに夢中になっていること、それを３０年以上も続けていること、そのおかげで今の私があることは、よくわかっている。

私の名は、西海ゼミで誕生した。今から 34 年前、東北大学の助手だった父は生まれてくる子供は絶対に男だと確信し、男の名前しか用意していなかった。しかし生まれてきたのが女だとわかり、ゼミの学生に投票させて「なおこ」という名前に決まったそうだ。もちろん当時、父は教授ではないから、厳密には西海ゼミではない。しかし父親の教え子に名づけられたという事実は、私の人生と父の仕事を永遠に結び付けている。

子供の頃、父に「どんな仕事をしているの？」と尋ねると、こんな答えが返ってきた。「オゾン層を破壊する悪いガス＝フロンを、光で分解して塩に変えるんだよ」。ほほ～う。何か環境に良いことみたいだな！･･･以来、今に至るまで、私は他人に父親の仕事を説明する時、このフレーズを使っている。私は研究の中身はわからないが、悪いガスを分解して塩にしてやろう！という発想が面白いと思うからだ。そういう柔軟な好奇心を忘れず、他の人がやらないことを真剣にやっているのが父なのだ、と理解している。父の関心の対象は、なにも地球環境ばかりではない。新聞を読めば政治に文句は言うし、消防車の音を聞けば車に乗って火事現場まで追いかける。昔から山登りも大好きで、写真も撮るしスキーも滑る。一時は歴史研究にはまって、怪しいお守りを集めていた。私はこういう好奇心の塊みたいな人に振り回され、そしてその体験を共有して育った。中でも大きかったのが外国への興味・関心である。父は３５歳で日本の大学を飛び出し、母と私を連れてカナダに渡った。その後、日本に帰ってからも国際会議にかこつけて、たびたび外国に連れて行ってくれた。日本とは違う風土・価値観・文化・歴史に刺激され、私の興味と将来のベクトルが決まっていったように思う。父が父でなかったら、科学者でもなく西海ゼミをやっていなかったら、間違いなく今の私はなかっただろう。

その西海ゼミも３０周年。まずは、めでたい。しかし、一つのことを続けるのは楽ではない。研究テーマを見定めるのに迷ったこともあるだろう、毎年同じ大学のリズムにマンネリを感じたこともあるだろう。慣れない工学部長なんぞやらされて、ストレスで一杯になっただろう。それでも、まだ社会に自分の居場所がある、というのは幸せな人生だと思う。

ノーベル賞を取るまでは、そのままの勢いで学生に負けず頑張って欲しい。

お父さん、頑張って！